

長良川の自然、文化と地域科学

長良川は、全国的にも清流として知られています。

地域科学部でも、生物や文化、社会などさまざまな分野のスタッフが、長良川の調査や研究に取り組んできました。

こうした多様な側面から長良川について学ぶとともに、岐阜市内の長良川周辺の環境や歴史、まちづくりなどをめぐるフィールドワークを組み入れ、NPOや行政とも連携した企画を行います。

第1回 9月10日（土）10：15～16：15 開講式

□ 長良川の魚たち — 川の環境変化を魚の視点で考える 向井 貴彦

■ 長良川と流域の自然 — 森と川と海のつながり 肥後 睦輝

□ 長良川河口堰によって失われた自然環境と回復へのシナリオ 粕谷 志郎

第2回 9月17日（土）13：00～16：00（天候不順の場合、24日（土）に順延）

長良川橋周辺の暮らしと町並みを歩く 野村 典博・富樫 幸一

第3回 10月1日（土）10：30～16：30 修了式

□ 子ども自然体験の場としての長良川 稲生 勝

■ 江戸時代の治水と“地域の力” 筧 真理子

□ 川と人との関わり：トークとワークショップ 参加者と講師

- 会場 岐阜大学地域科学部1階 地101教室
9月17日のフィールドワークは長良橋周辺
- 受講対象者 関心のある方なら、どなたでも
- 定員 50名（*超えたときは、お断りすることがあります）
- 受講料 7,200円（学生 6,000円）
（*納入後の受講料はお返しできません）
- その他 3回受講された方には修了証書（岐阜大学）を授与します。

- 申し込み方法 受講を希望される方は、「住所、氏名、年齢、電話番号」を明記の上、郵送・持参・FAX・E-mailのいずれかの方法により、下記へお申し込みください。
受講料納入方法（銀行振込）については、お申し込みいただいた後にご連絡いたします。
- *ご連絡いただいた皆様の情報は、公開講座の目的に必要な範囲内において使用致します。ご自身の個人情報の開示・訂正・削除を希望される場合は、下記にご連絡ください。
- 申し込み期限 2011年9月2日（金）
- 申し込み先 〒501-1193 岐阜市柳戸1番1号
岐阜大学地域科学部 総務係
TEL：058-293-3003 FAX：058-293-3008
E-mail：chiiki@gifu-u.ac.jp

第1回 9月10日(土) 10:15開講式 10:30～12:00 / 13:00～14:30 / 14:45～16:15

■長良川の魚たち — 川の環境変化を魚の視点で考える：向井 貴彦 (生物学)

長良川には多数の魚たちが住んでいます。アユやサツキマスだけでなく、何十種もの魚たちが水中のさまざまな環境に適応して暮らしていますが、彼らの目から見た長良川の環境はどうなっているのでしょうか？ 昔に比べて魚が減ったという話もよく耳にしますが、本来の自然豊かな川とは、どのような環境なのでしょう？ 長良川の現状を、水の中のいきものたちの視点で考えてみたいと思います。



□長良川と流域の自然 — 森と川と海のつながり：肥後 睦輝 (森林生態学)

長良川は、上流のブナの森林、中流部の里山やヒノキ・スギ植林地、そして下流部のツブラジイやアラカシの常緑広葉樹林のような流域の多様な自然と結びつきながら流れています。川の流れは、流域の自然を形づくる働きを持っています。森の恵が川を通して海まで供給されることで、豊かな海の幸が育まれます。一方で、海の恵も川をさかのぼって、森へと届けられます。このような上流と下流、そして川と森林の有機的なつながりを通して、長良川を見つめなおしたいと思います。

■長良川河口堰によって失われた自然環境と回復へのシナリオ：粕谷 志郎 (公衆衛生学)

1995年から長良川河口堰の運用が始まりました。伊勢湾岸工業地帯への水の供給が主目的で、途中から治水も加わりました。運用されて、始めに起こったのが堰下流のヤマトシジミの死滅でした。酸素不足に加え、ヘドロの堆積が始まったからです。鮎やサツキマスなど海と川を行き来する魚介類が減っていきました。伝統の鵜飼は深刻な影響を受けています。堰の上流の水の溜まった所では、ヨシが枯れていきました。有機物は吸収されず伊勢湾の汚濁につながります。ヘドロも溜まり、環境ホルモンなどの化学物質が高濃度で検出されます。真水と海水が混ざりあう汽水域にダムを造ると必ず発生する環境破壊です。工業用水は一滴も売れていません。河口堰は潮止めの役割しか果たしておらず、治水効果は全くありません。汽水域を回復することが回復のシナリオの重要な点です。堰の運用でどこまで回復できるのか、全開したらどうなるのか、考えてゆきます。



第2回 9月17日(土) 13:00～16:00

■長良川橋周辺の暮らしと町並みを歩く

：野村 典博 (NPO 法人森と水辺の技術研究会)・富樫 幸一 (地理学)

岐阜市内には長良川と住民の暮らしの関わりを印した場所がいろいろあります。長良川の上下流との取引で栄えた湊や商家の跡、洪水や治水工事の記録、上下水道や忠節用水の建設、松尾芭蕉や川端康成などの岐阜にちなんだ文学碑、川原町などのまちづくり活動による町並みの整備など、学ぶところや見どころがもりだくさんです。長良川橋周辺を半日、歩いて回ることを通じて、川と人とのつながりを体験しましょう。

第3回 10月1日(土) 10:30～12:00 / 13:00～14:30 / 14:45～16:15 修了式

□子ども自然体験の場としての長良川：稲生 勝 (環境哲学)

岐阜市子どもエコクラブの一つである「自然・生きものクラブ・天神川」の活動を紹介したいと思います。他のエコクラブが学校単位であるのに対し、このエコクラブは、学校単位を超え、多くの小中学生が集い、長良川や最終的には長良川に流れる天神川などで自然体験をしています。この活動の紹介を通じて、自然体験の意義を考えます。



■江戸時代の治水と“地域の力”：筧 真理子 (岐阜市歴史博物館)

網の目のように川が流れる美濃地方では、古くから洪水に悩まされてきました。水害を防ぐためには広域にわたる工事が必要であり、川の上流と下流あるいは対岸で利害が対立します。そのため、多くの領主が入りまじっていた江戸時代の美濃地域では、治水工事の実現は容易ではありませんでした。しかし、自分たちの村を水の脅威から守るため、村人たちは粘り強く交渉を重ね、費用を負担し、挫折をくりかえすなかでより広い視野を獲得しながら、治水工事を実現させています。領主に頼るだけでなく“地域の力”を結集させたこうした人々の姿を、畑繫堤や板谷川築堤をとおして紹介します。

□トークとワークショップ：参加者と講師

川の流域の住民、一人ひとりにとって、川とのつながりは大事なものでしたが、近代化や行政中心の治水政策によって、そのつながりは薄れてきました。しかし、流域の森林や河川、生き物を守り、自然との関わりを見直し、歴史を学び、さらに現場を経験したことを通じて知ったこと、考えたことを、もう一度、受講者や講師陣が一緒になって話し合い、これからの川と人との関わりを考えていきましょう。